みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

中国客家地域における「霊性」と宗教景観の再生：広東省梅州市の都市部を事例として (特集・スピリチュアルの解明)

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2015-03-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 河合, 洋尚
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5592

中国客家地域における「霊性」と宗教景観の再生
——広東省梅州市の都市部を事例として

河合洋尚
（かわい　ひろなお／国立民族学博物館機関研究員／社会人類学）

1、はじめに

唯物史観を思想的な根幹とする社会主義国・中国では、宗教が厳しく制限されている。中国政府は目下、カソリック、プロテスタント、イスラム教、仏教、道教の五大宗教のみを公認しているが、これら諸宗教を行政の管理機構のもとに置き、思想と活動を統制している。しかし、だからといって中国の民衆が、公認された五大宗教のもと、制限された宗教活動しかおこなっていないのかといえばそうでもない。こうした制度の枠組みだけで中国の宗教実践を捉えてしまうと、中国民衆の信仰実践を理解する妨げとなってしまうであろう。

中国では、一九四九年に社会主義政権が誕生する以前にも、特定の宗教が「迷信」として批判され、取り締まりを受けることがしばしばあった。一九四九年の社会主義政権誕生以降、特に一九六六年から七七年にかけて生じた文化大革命期には、「宗教はアヘンである」との見解のもと、各宗教施設がかつてないほど大量に破壊された。だが、この時期ですら民衆の信仰心は衰えることがなかった。彼らは、いかなる政治状況においても、固有の教団や教組に依存しない超自然的存在との霊的なつながり、すなわち本特集でいうところの「スピリチュアリティへの信仰」を保持してきたのである(1)。

筆者は、二〇〇三年度から中国の華南地方でフィールドワークを続けているが、超自然的存在との霊的なつながりを重視するスピリチュアリティは、中国の信仰実践において無視できない役割を担っていると常々実感している。例えば、筆者が集約的な実地調査をおこなってきた梅州市では、一九四九年の社会主義政権樹立以降、多くの廟（神々を祀る祠）が壊されてきたが、民衆たちは、このような状況にもかかわらず、それらの廟の神々との霊的なつながりを水面下で保ってきた。そして、一九八〇年代に市場経済化の波が押し寄せると、海外華僑の力を借りて、彼らの霊的な感性を具現化すべく、宗教景観を再生していった。

本稿は、こうした宗教の枠では捉えきれない中国民衆のスピリチュアリティを「霊性」という語で表し、それが社会主義下にある中国でいかに根強く存在してきたのかを、梅州市の廟再建の事例から見ていくこととした。それにより、現代中国におけるスピリチュアリティの所

在の一端を描き出すことを、本稿の目的とする。

2、民国期における廟と「霊性」

梅州市は、中国広東省の東北部に位置しており、一つの区と七つの県を管轄している。梅州市の全市人口は約四九〇万人(二〇〇三年)であり、そのほぼ全員が客家という エスニック集団に属していると一般的に考えられている。また、梅州市は華僑の輩出地としても知られており、統計によれば、香港に約二六三万人、マカオに約二万人、インドネシアに約六五万人、タイに約六三万人、マレーシアに約三八万人の梅州籍華僑がいる(梅州市華僑志編輯委員会 二〇〇一:二九)。世界中に分布する客家華僑には、祖先が梅州市の出身である者が少なくないので、梅州市は「世界客都」(世界の客家の都)とも言われている。

そのうち、梅州市の中心部は梅江区と呼ばれる都市部であり、約三〇万人(二〇〇五年)の人口がある。梅州の名は宋代にまで遡ることができ、清の雍正一一年(一七三三年)には嘉応州として、今の梅州市の北部・中部一帯を管轄するようになった。そのうち、今の梅江区の中心部、特に梅江区の中心部を横切って流れる河川(梅江)の北側一帯には城が築かれ、その城壁の内部および周辺には市街地や市場等が形成された。また、住民の信仰を集める宗教施設もいくつか建設された。文字資料や高齢者からの聞き取りに基づき、民国期(一九二一~一九四九年)に存在した宗教施設をマッピングすると、**図1**の通りである。

図1は、現地の高齢者の心に残っている話に基づき、メンタル・マップとして描き出したものである。彼らの話によると、梅州市の中心地は、

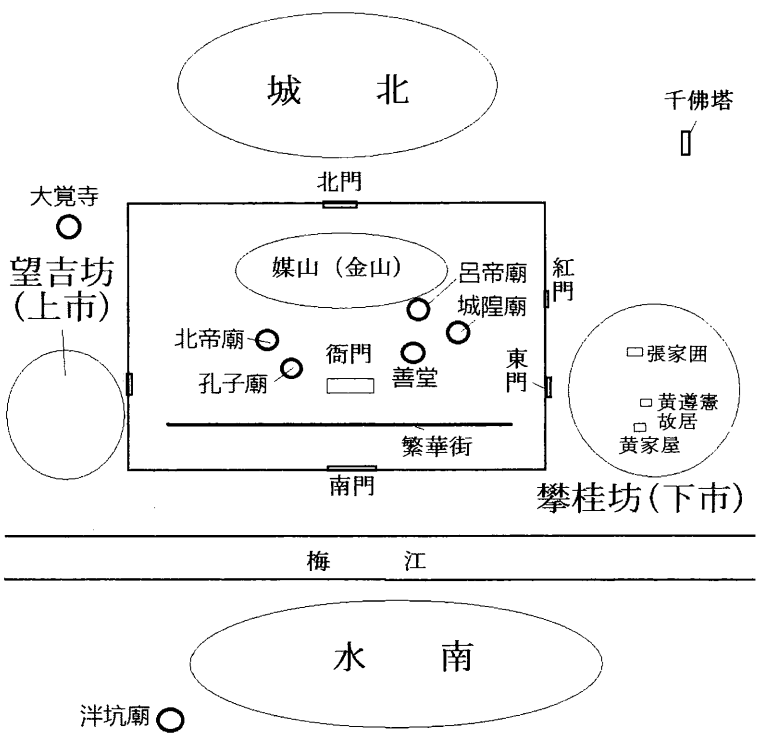

図1 民国期の梅州都市部における宗教施設の位置
＊位置は必ずしも正確でないことがあります。

金山（媒山）という小高い丘と梅江の間に位置し、かつては城壁に囲まれていた。この区域は現在、金山社区と呼ばれ、区政府や下町が存在している。かつては、衙門と呼ばれる行政機構や繁華街があり、最も栄えた地域であった。他方、城壁の西側を「上市」、東側を「下市」（あるいは「攀桂坊」）と呼び、特に後者は、黄氏、張氏、楊氏をはじめとする有力宗族が割拠する地であった。また、梅江の南側は「水南」と呼ばれ、現在でこそ栄えているが、かつては閑散とした村落が点在する静かな地であったと言われる。

現地の文字資料や高齢者からの聞き取りによると、民国期の梅州市には、カソリック、プロテスタントの教会や仏教寺院だけでなく、さまざまな神を祀った廟が存在していた。その数、種類は、現時点で目にすることのできる宗教施設よりはるかに多い。古くからの中心地であった金山社区で話を聞くと、なかでも民国期に住民の信仰を集めていた宗教施設には、次のものがあったという。

（A）呂帝廟・「八仙」（八名の有名な仙人）の一人である呂洞賓を祀る宗教施設。

（B）城隍廟・都市の神である城隍神を祀る廟を指し、中国各地に偏在する。現在の金山社区に位置する。

（C）北帝廟・北帝とは、二八宿のうち北側七星を司る玄武神を指し、水の神として崇められている。

（D）孔子廟・学問の神である孔子を祀るだけでなく、梅州では学校としても活用されていた。

（E）大覚寺・南北朝時代（六世紀）にまで遡る梅州最古の仏教寺院であり、梅江区の西側に位置する。尼僧寺院である千佛塔とともに、住民の加護や葬送儀礼などに関わってきた。

（F）洋坑廟・地元の熊氏が建てた公王神を祀る宗教施設で、洋坑公王廟とも呼ばれてきた。霊験あらたかであるため、一つの宗族を超え、梅江区で広く祀られるようになった。

もちろん、住民のなかにはプロテスタントやカソリックの信徒がいたし、媽祖廟など他の宗教施設に頻繁に参拝していた者もいた。しかし、筆者が金山社区とその周辺でフィールドワークをしていた際、霊験あらたかであった宗教施設として筆者がしばしば聞かされたのは、以上の六つであった。

図1を見れば分かるように、六つの廟のうち、呂帝廟、城隍廟、北帝廟、孔子廟の四つは、いずれも城壁内にあり、地理的に接近している。民国期の梅州は、それほど豊かな地区ではなく、医療も発達していなかった。それゆえ、金山社区の住民は、病気になるとこれらの廟を訪れ、神々の判断を伺った。一九四〇年代から五〇年代にかけて金山社区に居住していたA氏によると、ここの住民は病気になると呂帝廟等に行き、そこでどこが悪いのかを伺った後、近くにある善堂（福祉施設）に行ってお告げに出た薬を受け取っていたのだという。

呂帝廟、城隍廟、北帝廟、孔子廟は、表面的には、道教や儒教の宗教施設であると考えられている。だが、住民にとっては、これらがどの宗教に属するかよりも、どれだけご利益があるかの方が重要であった。これらの廟は、彼らに心の安定をもたらし、人々が超自然的存在との霊的なつながりを確認する、かけがえのない場所だったのである。

3、共産主義革命による廟の破壊と「霊性」の保持

このように、民国期に存在した梅江区のいくつかの宗教施設は、地域住民の精神的な拠り所として存在していた。特に、呂帝廟は、地域住民の信仰を広く集めていたため、客家華僑の移住に伴い東南アジアでも分祠が建てられるようになった。しかし、中国では一九四九年に共産党が主権を握り社会主義政権を樹立したため、徐々に宗教施設が壊されていった。梅州市でもまた、一九五〇年代になると、多くの宗教施設が統制されたり、壊されたりした。中国政府は、一九五〇年代まで宗教に対して比較的寛容な態度をとったともいわれており、神仏への信仰は引き続きおこわなれたという。だが、高齢者の話によると、梅江区では、一九五〇年代にはすでに宗教への抑制が始まっており、城隍廟と北帝廟は廃墟とされた。

中国の他の地域と同じく、梅州市で宗教および宗教施設にまつわる徹底的な破壊がおこなわれたのは、一九六六年から約一〇年間続いた文化大革命であった。城隍廟と北帝廟は倉庫となり、呂帝廟、孔子廟、大覚寺、洋坑廟では、信仰活動が禁止されたり、神像・仏像が壊されたりした。この時期は、祖先崇拝ですら細々と続けるしかなかったといい、その他の信仰・崇拝を表立ってすることは、政治的に許されなかった。宗教的実践は、唯心論的な試みであり、アヘンであるとして全面的に否定されていたのである。

ところが、だからといって、この時期の地域住民が信仰心を完全に捨てていたわけではない。表立った宗教活動こそできなかったが、彼らは、神仏との霊的なつながりを変わらず保持していた。具体的には、彼らは、城隍廟と北帝廟が壊れる前に、本物の城隍神と北帝神を隠し、偽物を置いて破壊させた。同様に、呂帝廟の主神である呂洞賓の神像も隠し、偽物と挿げ替えた。そして、文化大革命が始まり、梅江区の宗教施設が次々と壊されていくなかにあっても、地域住民は結託して本物の神像を守り続けた。彼らは、表立った宗教活動こそできなかったが、民国期から続く神々と地域住民との「霊性」を懸命に保持するよう試みたのである(2)。

4、改革・開放政策以降の廟の再建

周知の通り、一九七六年に毛沢東が亡くなり、四人組が逮捕されて文化大革命が集結すると、中国は、市場経済化路線を採択するようになった。その第一歩となった政策が、一九七八年一二月に時の指導者であった鄧小平が打ち出した改革・開放政策である。改革・開放政策は、深圳、珠海、汕頭、厦門に経済特区を建設し、外資の一部導入を図る政策である。それゆえ、特に一九八〇年代になると中国は、諸外国(便宜的に香港、マカオ、台湾を含む)との交流を始めるようになった。こうした潮流のなか、諸外国に多くの華僑を送り込んでいる梅州市もまた、華僑マネーの獲得のため、諸外国との交流を強めた。

一九八〇年代に梅州市で発刊された『僑声』を翻すと、政府から民間レベルに至るまで、梅州市が諸外国との連絡を強化していることが分かる。当時の梅州市は、エズラ・ヴォーゲルが指摘しているように、広

東省で最も貧しい地区であり（Vogel 1989：242-247）、それだけに改革・開放政策後は華僑からの支援に頼る部分が大きかった。したがって、特に一九八〇年代は華僑の発言力が強く、また、華僑を受け入れるために宗教政策までも緩和せざるを得なかった。もっとも梅州市政府は、既に破壊した城隍廟や北帝廟を自ら進んで修復することはしなかったが、華僑や住民の自発的な宗教施設の再建に対しては黙認する形をとった。その典型となったのは、呂帝廟の再建であった。

前述の通り、呂帝廟は、民国期になるまでには地域住民の厚い信仰を集め、また、東南アジアでも分祠が建設された。社会主義政権の樹立後、今の金山社区にある呂帝廟は表向きには形骸化していくことになるが、一九八〇年代に入って、タイの華僑が呂帝廟の復活を要求するようになった。タイでは、バンコクに大きな呂帝廟があるのだが（**下写真**）、彼らは故郷にある本家の呂帝廟を復活させなければならないと考えたのである。当時の梅州市政府は、宗教活動の再開に熱心ではなかったが、華僑マネーの獲得のためにも、タイ華僑の要求を無視することができなかった。それゆえ、区政府に近い金山社区で呂帝廟を再建するのではなく、都市郊外に新たな廟を建てることを許可した。その結果、タイの華僑は、梅江区の東郊外に呂帝廟を新築することに決め、一九八五年二月に「贊化宮」という名で再建した。この新たな呂帝廟は、「道教聖地」として、道教協会の管理下に置かれることとなった。つまり、国家公認の宗教として、活動が認められたのである。

ところが、郊外に移転させられたこの国家公認の宗教施設は、金山社区の住民には受け入られなかった。筆者が話を聞いた地域住民のな

かには、この新しい廟は偽物だと語るものもいた。彼らは、金山社区にもともと存在した昔の呂帝廟にこそ、「霊性」を認めていたのである。だからこそ、彼らは、「道教聖地」としての贊化宮が建設された時、偽物の呂帝像を渡したのだという。そして、金山社区の住民達は、香港、台湾、インドネシアの親戚達と連絡をとり、資金を集めて、一九八八年四月に民国期からある呂帝廟を再建した。それだけでなく、彼らは、この廟に今まで隠しもっていた本物の城隍神と北帝神の像も置き、形を変えて民国期から続く信仰を復活させることに成功したのである。

この事例から明らかであるのは、地域住民は、国家の宗教的枠組みに捉われず、昔から続く「霊性」を頼りにして信仰を継続させていることである。ここの呂帝廟は、現地の政府にも学者にもマス・メディアにも注目を浴びていないが、地域住民にとっては、彼らの「霊性」とかかわる重要な施設である。したがって、旧暦四月一四日の呂帝神の誕生祭の折には、贊化宮に比べて、旧来の呂帝廟では地元の参拝客で賑わっている。彼らを動かしているのは、宗教的枠組みではなく、「霊性」のあり方なのである。

5、客家政策による宗教景観の創造と「霊性」

国家の宗教政策と民衆の「霊性」の乖離は、二一世紀に入ってから、梅州市ではより顕著に見られるようになった。前述の通り、梅州市は客家の集住地として知られるが、梅州市政府は、少なくとも一九八〇年代まで客家を資源とした地域開発をおこなってこなかった(河合二〇〇三)。しかし、一九九〇年代に入ると、梅州市政府は地域的特色を出す資源として客家に着目するようになり、二〇〇三年には客家文化を用いた地域開発を政策の根本に置くようになった(3)。そのなかで興味深いのは、ここ数年間、梅州市の地方政府、学者、マス・メディアが、「客家文化」の一環として「宗教」的活動を利用し始めたことである。

冒頭で論じたように、中国で宗教といえば、カソリック、プロテスタント、イスラム教、仏教、道教の五大宗教を指す。従って、梅州市政府が「客家文化」として推し出す宗教の一つの類型は、これら公認された宗教である。例えば、先述の贊化宮の他、洋坑廟もまた特色ある宗教景観として宣伝されている。先述したように、洋坑廟は、公王を祀る廟として民国期から地域住民の信仰を集め、現在では国家により道教の廟として位置づけられている。ただし、地方政府、学者、マス・メディアが何よりも注目しているのは、この廟が、三山国王神を祀っている宗教施設であるという点にある。

三山国王神とは、台湾やマレーシアでは客家地域に多いため、「客家神」として知られる。ただし、中国では潮州人地域に多い信仰であり、洋坑廟もまた、潮州市〈商売に出かけた熊氏一族が三山国王廟の分祠として梅州市で建てた廟である。だから、梅州市では、三山国王神という聞きなれぬ呼称ではなく、梅州市で比較的多い公王神として崇められてきた。しかし、政策側にとって、洋坑廟を三山国王廟として再発見し宣伝することは、より多くの華僑を呼び寄せる資源となる。したがって、洋坑廟は、地域的な特色を出し外部者を引き寄せる宗教的景観として、政策的にアピールされるようになっている。

他方で、さらに興味深いのは、梅州市政府が国家により公認されていない信仰でさえも、「客家文化」として重視するようになっていることである。その典型例は、孔子廟の再建である。孔子廟にある碑文によると、この廟は南宋の時代に始まり、歴史的に儒学を教える教育機関としても機能してきた。前述の通り、社会主義政権の樹立に伴い、孔子廟は機能しなくなったが、二一世紀に入って市政府は孔子廟の再建を促進した。周知の通り、儒教は、国家により公認された宗教ではなく、また、文化大革命の際には「悪しき封建的習俗」として攻撃の対象となった。しかし、近年では、中国各地で孔子廟が再建されるようになるなど、国家は再び儒教の意義を認めるようになっている。梅州市における孔子廟の再建は、一方では、こうした儒教を見直す最近の風潮と関係したものである。ただし、梅州市の場合は、他方で、孔子廟を客家文化と結びつけ、この都市の特色ある都市景観をつくりだす資源ともされている。梅州市の孔子廟には、以下のような説明書きがある。

「学問を重視することは、客家の伝統的な美徳である。梅江区の共産党委員と区政府は、人民の意志を汲み取った政治に勤しみ、資金を集め、専門家に伺いを立て、昔の様式に従って設計・修復し、さらに規模を拡大することで、客家文化の特色に溢れた孔子廟公園を建設した」。

こうして、梅州市の孔子廟は、客家文化との結びつきにおいて、二〇〇六年一二月に再建された。孔子廟の空間構造としては、民国期以前より続く廟を入り口の右手に保存し、一番奥の大きな殿堂を修復し、そこに孔子像を置いた。

しかしながら、地域住民は、こうして市政府により推進された宗教景観の創造を冷ややかに見ている。とりわけ、彼らは、新たに拡大・再建された孔子廟に対する不満をしばしば口にしている。確かに、梅州市の孔子廟はこの地に古くからあり、少なくとも民国期には、学問の神を祀る「霊性」の溢れた場所であったと考えられていた。しかし、それは廟の入り口右手にある古い廟に限っての話であり、いま孔子像が祀られている殿堂は、一九九〇年代までは政府関係者が遠方からの来客を泊める「招待所」（ゲストハウス）にすぎなかった。従って、ここに孔子廟を置いても、何のありがたみもないのだという。B氏は、孔子廟の拡大・再建工事が税金の無駄使いであり、古くからの孔子廟を閉鎖し像を移動させることで、むしろ孔子廟の「霊性」をなくしてしまったことに怒りを露わにしていた。実際、この孔子廟はいつ訪れても閑古鳥が鳴いており、たまに来客を見かけても、その大多数は梅州の外から来た客家語の話せない観光客であった。地域住民は、入り口右手の古い孔子廟にのみ線香を捧げることはあるが、孔子廟全体に関しては「霊性」を感じないとして、ほとんど訪れることはない。

それに対して、地域住民は、洋坑廟に対しては変わらぬ「霊性」を認めている。従って、彼らのなかには、車で一五分ほどかかるこの廟に、わざわざ参拝に行く者もいる。ただし、彼らは、この廟が三山国王廟であると説明こそするが、洋坑廟の主神が三山国王神であるということが参拝の理由につながっているわけではない。地域住民にとっては、この廟の主神はあくまで公王神であり、日常的にも公王神という名称を好んで使う。また、この公王神の「霊性」を身近に受け取るため、彼らは修復した古い呂帝廟にも公王神の化身を置き、その神像の頭上に

ある鏡に「公王」の二文字を書き込んでいる。にもかかわらず、彼らは、目と鼻の先にある孔子廟には訪れようともしない。つまり、地域住民は、それが客家らしい宗教的景観を体現しているか否かではなく、民国期以前から続く「霊性」のあり方に応じて、信仰を実践しているのだといえる。

6、「霊性」をめぐる地域住民の諸行為

ここまで見てきたように、梅州市の民衆による信仰実践には、「霊性」をめぐる感性が大きなウェイトを占めていることが分かると思う。「霊性」は、国家による宗教的枠組みでは捉えることが難しいが、地域住民の宗教行為を動機づける動力の一つとなっている。

「霊性」は、時として地域住民の経済的資源となり、さらに権威を増大する象徴資本ともなっている。梅江区に位置するある一族（仮にX宗族と名づける）は、近年、客家文化を利用した公園を建設する計画を立てている。しかし、X宗族が公園建設計画を立てている真の目的は、政府が推進する客家文化の高揚を手助けすることではなく、数地内にある彼らの祖先の墓を都市開発の魔の手から守ることにある。彼らは、この墓の風水が非常に良いため、別の場所へ移動することができないと考えている。また、墓の付近には、始祖と親しい仲にあったと彼らにより考えられている、定光古佛という神の指が埋葬されている。X宗族は、この神の指も一族に幸運をもたらしていると考えており、この一帯を「霊性」に溢れた重要な場所であると主張する。それゆえ、この土地と祖先の「霊性」を守る手段として、市政府の政策と歩調を合わせ、客家らしい景観をもつ公園をつくろうとしているのである。

X宗族は、梅江区では比較的大きな一族であり、社会的に成功した親戚を数多く輩出している。彼らは、その理由として、祖先の墓と定光古佛がもたらす「霊性」を挙げており、この「霊性」を守ることは一族の精神的支柱を守ることにもつながっている。それゆえ、梅州市とその近隣地区に住む親戚だけではなく、海外に居住する親戚からも寄付を募り、公園建設を十分に可能にするだけの資金を集めた。特に、香港、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、モーリシャス等の地に住む親戚が大金を寄付したため、X宗族の運営資金は潤沢にある。ここ数年の間、X宗族は周囲環境を大きく整備し、また、客家文化の名目の下、始祖の墓で毎年、春祭りと秋祭りを行っている。祭りには、中国国内だけでなく、海外の親戚も参加する。X宗族の活動は、市政府の方針とも重なっているため、彼らの公園化計画はすでに市政府の認可を得ている。

X宗族の公園化計画は、表面的には、客家らしい景観を創り出し空間的特色を出そうとする、政治経済的行為に影響されたものかのように見える。しかし、彼らが、自分たちで資金を集めて公園化計画を進めている内的な理由は、政策とは離れたところに、つまり「霊性」との関係にある。彼らは、「霊性」を保つために国を超えて資金を集め、それにより一族のプライドと威信を保持しているのである。別の角度から見れば、彼らが運営資金という経済資本と威信という象徴資本を獲得する要因として、「霊性」の存在を無視することはできない。

7、おわりに

文化人類学者である志賀市子は、儒教・道教・仏教など既存の宗教の枠では捉えきれない中国民衆の信仰形態を、「スピリチュアリズム(の信仰」と呼んだ(志賀　二〇〇六：六四)。志賀は、民国期の上海を事例とし、中国では、こうした「スピリチュアリティ(の信仰」が戦前より存在していること、また現代中国社会にまで脈々と続いていることを指摘している(志賀　二〇〇六：七五、志賀　二〇一二)。志賀のこの指摘は、広東省の一地方都市である梅州市でもある程度該当するものである。本稿の事例から明らかなように、梅州市では、少なくとも民国期から超自然的存在との個別のつながりを重視するスピリチュアリティ(「霊性」)があり、それが改革・開放政策以降の信仰行為にも影響していたからである。

以上に見てきたように、中国民衆の信仰をより深いレベルまで理解するためには、スピリチュアリティを無視することはできない。近年の中国ではキリスト教、イスラム教、仏教の信者は増えているが、こうした国家公認の宗教だけに拘ると、なぜ中国の民衆が特定の宗教施設に近寄らないのか、なぜ特定の信仰を自発的にしているのかを、理解することができない。実際、中国の各級政府は、国家により公認された五大宗教や儒教といった特定の枠組みからしか物事を考えず、民衆の信仰行為の「根本」を見落とすことがある。ただし、中国政府の宗教への態度は省によって異なっているため、地方政府によっては、民間の「霊性」を黙認することで、民衆の自発的な活動を促すこともある。例えば、X宗族の公園化計画においては、一族に政府とつながりのある有力者がいたため、市政府は「霊性」が計画の動機になっていたことを把握していた可能性がある。少なくとも結果論として見るならば、黙認することで「霊性」を利用し、市政府は、民間の自発的な活動と資金を通じて、政府の予算を使うことなく、地域特色をもつ宗教景観をつくりあげることに成功していたのである。「霊性」は、中国民衆の信仰を動かす力であるが、今後は「霊性」がポリティクスとして使われてきた側面も考察していかねばならない。

注釈

(1)スピリチュアリティは多義的な用語であるが、本稿では、制度的な宗教とは無関係であり、超自然的存在と見えないつながりを実感する思想と実践を、スピリチュアリティ(中国語で「霊性」)と定義する。

(2)文化大革命では、宗教的活動が全面的に禁止されたが、神像を隠したり水面下で信仰を続けたりしていた事例は、梅州市以外でもよく耳にした。例えば、広東省広州市のある村では、文化大革命期に北帝廟が倉庫とされ、廟での信仰は難しかったが、自宅で信仰を続けていたという。また、同村では、四百年以上前から龍舟祭を催してきたが、文化大革命期は信仰にまつわる部分だけ省略して、競技のみは続けていたという。この村の村民たちは、一九九二年に鄧小平が「南巡講話」に来た時、それまで控えてきた公の信仰活動を復活させた。

(3)梅州市政府は、二〇〇三年四月二日に「文化梅州」にまつわる戦略会議を開催し、梅州市共産党書記の劉日知により、客家文化を用いて経済発展を促進していく方針が強調された。また、同共産党宣伝部は、これまで客

家文化を有効的に使ってこなかったことを反省し、それを都市の特色づくりや文化産業の育成に役立てていかねばならないと論じた。

参考文献

樫尾直樹　二〇〇五
「スピリチュアリティ」井上順孝(編)『現代宗教事典』引文堂、二九五-二九六頁。

河合洋尚　二〇一三
「空間概念としての客家――『客家の故郷』建設活動をめぐって」『国立民族学博物館研究報告』三七-二(一九九-二四四)

志賀市子　二〇〇六
「近代上海のスピリチュアリズム――霊学会とその時代」『アジア遊学特集=アジアのスピリチュアリティ――精神的基層を求めて』八四号、六三-七五頁

志賀市子　二〇一二
『〈神〉と〈鬼〉の間――中国東南部における無縁死者の埋葬と祭祀』風響社

島園進　一九九六
『精神世界のゆくえ――現代世界と新霊性運動』東京堂出版

Vogel, E. F.1989
One Step Ahead in China:Guangdong under Reform. Cambridge, Mass: Harvard University Press